



世界ベストブックス

1981年1月10日 第1刷 © 1981年

発行 日本リーダーズダイジェスト社

〒100 東京都千代田区一ツ橋1丁目1番1号

Tel. 東京 (03) 284-4201

郵便振替口座 東京 163238番

印刷 大日本印刷株式会社

〒162 東京都新宿区市谷加賀町1丁目12番地

製本 小高製本工業株式会社

〒162 東京都新宿区北町41番地

© 1981 by The Reader's Digest of Japan, Ltd.

All rights reserved throughout the world. Reproduction
in any manner in whole or part in Japanese or other
languages prohibited.

乱丁や落丁の本はお取り替えいたします。

113

Printed in Japan 0098-6066-6044

リーダーズダイジェスト

世界 ベスト ブックス



世界ベストブックス



リーダーズ ダイジェスト

目 次

エネルギー危機

アーサー・ヘイリー

OVERLOAD

Arthur Hailey

8

ハリックの冒険

ユース・クラークソン

HALIC: The Story of a Gray Seal

Ewan Clarkson

214

ヒマワリを狙え!

マリリン・シャープ

SUNFLOWER

Marilyn Sharp

272

僕は負けない

アラン・マーシャル

I CAN JUMP PUDDLES

Alan Marshall

440

エネルギー危機

アーサー・ヘイリー

酷暑の続くカリフォルニア——この州最大の公益企業ゴールドデン・ステイト電力では発電所をフル回転させるのだが、需要にはとても追いつかない。折しも、発電機が過激派に爆破される。電力飢饉は必至だ。にもかかわらず、各種の発電所新設計画が、マスコミや環境保護団体、活動家グループの反対に遭い、企画担当副社長ニム・ゴールドマンは頭を痛めるのだった。

作家独自の広範かつ緻密な取材に基づく傑作の一編。



ハリックの冒険

ユージン・クラークソン

ハリックは、ウェールズの西、ラムジー水道で生まれたハイロアザラシ。ある日嵐に襲われ、母親と生き別れてしまう。ひとりて海をさまようことになった幼いハリックだが、放浪するうちに生きていく術を身につけ、たくましい雄アザラシに成長していく。多くの危険にも出合うが、なによりも動物たちを脅かすのは人間たちの所業だった。一頭のアザラシを通じて、自然・動物・人間のかかわりを問う、動物の冒険物語。

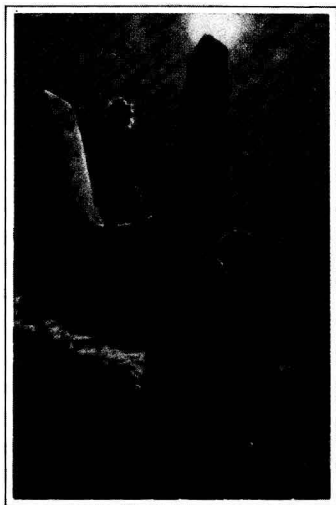


収録作品

ヒマワリを狙え！

マリリン・シャープ

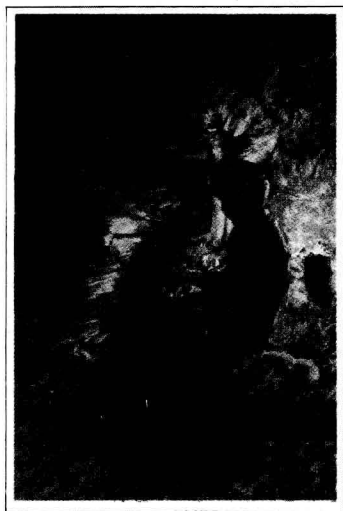
大統領の愛娘が誘拐される——それも大統領の命令で。この奇想天外の作戦は、CIAの高官になりすぎているロシア側スパイをあぶりだすためのものだ。このプランを成功させるためには、四歳の子供を秘密警察の警戒網をくぐって連れ出さねばならない。任務を命じられたのはCIAの有能な諜報員オーエンだ。だが、その背後の真相ははたして何か？ 作者の巧みだが語り口は冒頭から読者を物語の中に引き込んでゆく。



僕は負けない

アラン・マーシャル

アラン・マーシャル少年は小児麻痺に罹り、脚が不自由になってしまった。しかし、少年は身体の障害を、人生に対する障害とはしなかった。松葉杖をついて学校に通い、野を駆け、馬にも乗り、そして泳げるようにさえたのだ……オーストラリア人作家が、逆境を見事に乗り越えて、楽しく、充実して過ごした自分の少年時代を、今や消えゆく奥地での素朴な生活を背景に、ユーモアを交えて活写した自伝。





エネルギー危機

アーサー・ヘイリー

Overload より要約

© 1978, 1979 by Arthur Hailey

イラスト David Blossom



此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ゴールドデン・ステイト電力——この大規模な公益企業の発電機が過激派の手で爆破された。そのため、猛暑の続くカリフォルニアの広大な地域が停電した。だが、これは今後予想される電力飢饉きんのほんの前兆でしかない。電力消費を規制し、発電所を新設していかないかぎり、停電の日常化は明らかだ。

ニム・ゴールドマンは同社の企画担当副社長である。各種の発電所計画がマスコミを始め、各方面からことごとく反対を受けて頭を悩ます彼は、その新設計画に関する公聴会の席での暴言が元で会社のスポークスマンを下ろされて窮地に陥る。そんなとき、彼の妻は謎の外出をするようになっていた。結婚生活が色あせて見え始めたとき、彼は四肢麻痺まひ患者の美しい女性と知り合う——

暑い！ 息も詰まりそうなうだるような暑さが、カリフォルニア州の、南はメキシコとの国境から、北はオレゴン州の広大なクラマス・フォレストまでを包み込んでいた。四日前、既に長さ数千マイル（一・マイルは約、幅三〇〇マイルにわたる乾燥した上昇温暖気流がこの州の上にどっかりと居座っていた。今、七月のある水曜日の午後一時、カリフォルニアの人びとは、三二度から三八度を優に越えようという気温の中で、いつ果てるとも知れぬ暑さにうだっていた。

市内といわず郊外といわず、あらゆるところの工場、オフィス、商店、一般家庭で、六〇〇万台もの冷房装置がうなりをあげていた。肥沃なセントラル・バレイの何千という農場では、無数の電動ポンプが深い井戸から水を吸い上げるとすぐに、のどを渴かした家畜とからからに干上がった作物——穀類、ブドウの木、柑橘類、ムラサキウマゴヤシ、その他いろいろなものに供給していた。おびただしい数の冷蔵庫と冷凍庫のモーターは休む暇もなく回転し続けていた。カリフォルニア州はこれまで何度か熱波を切り抜けてきたが、これほどまで電力の需要が増大したことはなかった。

「そこなんだよ、つまり」と送電部長が言った。「そら、作動予備発電設備の最後の一台まで回転中だ」

その声の届く範囲にいた者——ゴールドデン・ステイト電力会社のエネルギー・コントロール・センターにいた常勤スタッフとこの会社の役員たちは、全員そのことを承知していた。ゴールドデン・ステイト電力は大規模な公益企業であり、カリフォルニア州の電力と天然ガスの三分の二を生産・供給する源泉である。また、この会社は大資本を有し、強大で、同社の公言するところによれば優良な企業である。地下にあるエネルギー・コントロール・センターは厳重に安全を確保された指令室で、その中心には通信制御卓があり、送電部長と六人の部下が働いている。その近くには二台のコンピュータの端末機がある。壁には何列もスイッチが並び、この州のいたるところにある、この会社が所有する九四の発電所の二〇五基の発電装置を監視する計器と共に、送電線路と変電所の一覧図が掲げられている。

「もう電力が買えないというのは確かなんだな？」質問したのは送電制御卓のそばに立っていた上背のある筋肉質の男だった。上着を脱ぎ、ワイシャツ姿になっている。ゴールドデン・ステイト電力の会長補佐で、企画担当副社長でもあるニム・ゴールドマンはがっしりしていて血色もよく、きりりとした顔だちをしており、相手をまったく見据え、今日はそうでもないが、たいていはちょっぴりユーモアのうかがえる目をしている。年齢は四〇代の後半で、わずかに白いものが交じるカールした黒髪のニム・ゴールドマンは、ふだんは年より若く見えるのだが、このときは仕事の重圧のためにいつもより老けて見えた。ここ数日、彼は夜半まで仕事を続け、そのうえ朝の四時には起きるといふ生活だったからである。コントロール・センターにいるほかの人間と同様、ニムも汗だくだった。この電力危機に際して、消費者に電力節約を強く訴えている立場上、この部屋の冷房も切っていたからである。

ニムの質問に答える、白髪で老練の送電部長の口調は怒気を含んでいた。それというのも、送電部員たちはこの二日というものの余剰電力を外から買いつけようと電話をかけ続けだったからである。「オレゴンとネバダから買えるだけは買っていますよ。アリゾナがちょっと援助してくれていますが、あちらも困ってます。明日になれば、今度は売ってくれと向うから言ってくるでしょうな」

「今日の午後は乗りきれそうかな？」会長のＪ・エリック・ハンフリーが、三〇年もカリフォルニアに住みながらも、まだ抜けないボストン氣質の冷静さを示しながら洗練された口調で尋ねた。彼は小柄でひきしまった体格をしており、この暑さにもかかわらずダークスーツを着ていた。

「それがどうもうまくいきそうもないのです」送電部長が答えた。

送電部長がつい先ほど指摘したとおり、ゴールデン・ステイト電力の作動予備発電設備の最後の一台までがフル回転に入っていた。この会社には二種類の予備発電の方法がある。「作動」と「待機」である。「作動」のほうは最大出力以下で運転されているが、ただちに出力を上げられる発電機群からなっている。「待機」のほうは運転を休止しているが、いつでも運転開始できる態勢にあり、一〇ないし一五分以内に最大出力まで上げられる発電所群からなっている。

一時間前、「待機」の最後の発電所であるフレイザー近郊のガスタービン発電所が「作動」に切り替えられていた。今このガスタービンが最大出力まで上げられようとしている。そうなければもう予備発電力はまったくなくなってしまう。

トビー・ジャグという、一八世紀ふうの老人の全身像をかたどったビルジョッキにそっくりの顔と、突き出たような眉をした軽い猫背の男ががらがら声をあげた。「番生！今日の天気予報が当たってれば、今ごろこんな袋小路に追い詰められることはなかったのに」これは電力供給担当の副社長、レイ・パウルゼンだった。

「よその天気予報係だってみんな、うちの予報係と同じ間違いをしたんだよ」とニムが抗議をした。「僕も、昨日の夕刊で、今日は涼しくなるって書いてあるのを見たよ」

「うちの予報係もそれで見ただけに違いはないよ——どこかの新聞でな！」パウルゼンがニムをにらみつけると、ニムは肩をすくめた。この二人の仲の悪いのはだれ一人知らぬ者はいなかった。

「よせよ、レイ」ニムは言った。「そんなことを言ってみても、どうなるものじゃない。この危機をどうにか乗りきろうじゃないか」

電力の需要は供給を上回るだろうか。当面の大問題はこれである。もし答えがイエスなら、必然的に全変電所のスイッチは切れ、全地域が停電になり、大混乱を引き起こすことになる。

ハバーセントの電圧低下が午前一〇時から行なわれていた。電圧の低下はヘアードライヤーから大型の電気器具にまで影響を及ぼし、効率を悪くする。それに、電圧はハバーセントまでしか下げられない。それ以上下げれば、電動モーターはオーバーヒートするか焼き切れてしまう。残る手段は配電停止、広域にわたる停電しかない。

もしゴールドデン・ステイト電力がなんとか持ちこたえて電力需要のピークである午後の三時ごろを過ぎれば、その後は消費電力は減少するだろう。そして明日が涼しければ問題はない。しかし、もし現在の消費電力が増大すれば最悪の事態が起こりうる。

レイ・パウルゼンはおもしくしく言った。「もし天気予報が当たっていたら、マガリアを休止させたりはしなかったんだが」サクラメントの北方の発電所にあるマガリア第二は最大出力六〇万キロの蒸気駆動の発電機である。しかし、たび重なる不調のため、何度も運転休止を余儀なくされていたものである。昨夜、気温低下の天気予報を読んだパウルゼンは、ボイラーの漏れを修理するためにこの発電所の休止許可を出した。再開の要請がいかに強くとも、あと二日は運転不可能だ。

ニム・ゴールドマンは送電制御卓のところで何事か議論をしていたが、ついに「もう、なんにも考えることはない。三〇分後には配電を停止するほかはない」と言った。彼は会長をちらっと見て言った。「マスコミに警報を出しましょう。テレビとラジオにならまだ警報を出すことができます」

「そうしてくれ」ハンフリー会長は言った。

一同の顔つきが陰しくなった。意図的に配電を停止することは、一世紀と四分の一にわたるこの企業の歴史の中でかつてなかったことである。ニム・ゴールドマンははや電話に向かって広報の指示を出していた。停電は次々と地域を変えて行なう旨を通告することに以前から決まっていた。これは停電が一時的なものであることを

強調する宣伝策である。

「だれか部長の居場所を知らないか」会長が尋ねた。部長とはもの静かで沈着なスコットランド人、ウォルター・タルボット技術部長のことである。困難な事態に臨んだときの彼の賢明さは伝説的になっている。

「はい」ニムが返事をした。「ビッグ・リルを調べに行っています」

それを聞いて会長は顔をしかめた。「なにか悪いことでもあったわけじゃないだろうね？」

一同の目は、ラ・ミシオン第五という文字のある計器盤に注がれた。これが市の郊外五〇マイルにあるラ・ミシオン発電所の最新最大の発電機、ビッグ・リルである。

ペンシルベニアのリリアン・インダストリー社で製造されたビッグ・リルは、一二五万キロワットを生産する怪物のような発電機である。大量の石油を燃焼して過熱蒸気を産生し、巨大なタービンを駆動させる。今日このエネルギー・コントロール・センターのグラフの記録では、ビッグ・リルが、この電力会社の総出力の六パーセントを引き受けて最大能力で運転されていることが示されている。

「今朝タービンの振動が報告されたので、部長は調べてみなければいけないと思ったのです」とレイ・パウルゼンが説明した。

事件が起こったのは、ちょうどそのときだった。ラ・ミシオン第五の標示の下で、一連の短くて鋭いブザーの音が響いた。同時に、琥珀色と赤色の警告灯が瞬き始めた。第五のグラフのインクのついた指針がふらつき、ついで滑り落ちてゼロになった。

「たいへんだー」だれかが叫んだ。「ビッグ・リルがダウンした」

高スピードのタイプライターが生命を得たように動き始め、スイッチ・センターと変電所の何百という遮断器が接点を離れていく状況報告をたたき出した。遮断器が作動すれば送電系統は保護され、ほかの発電機に打撃を与えずにすむだろう。

しかし、事故は既にこの州の広い地域を完全に停電させるという事態に陥っていた。